

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05688

研究課題名(和文) 太平洋島嶼部における強制移住経験者の共感による連帯と排他性の生成に関する研究

研究課題名(英文) The formation of solidarity and exclusive attitude: Empathy, compassion and the historical memory of Banabans in the Pacific Islands

研究代表者

風間 計博 (KAZAMA, Kazuhiro)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：70323219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、強制移住の歴史経験をもつバナバ人を対象とし、共感や同情といった心的事象に着目する。これらの感情がバナバ人ディアスポラをいかに連帯させるのか、同時に、近接する他者に対する排他性をいかに生成させるのか追究する。感情に関わる人類学の文献研究に加えて、故郷バナバ島からフィジーのランビ島を経て、首都スヴァおよびキリバス、さらにニュージーランドに再移住した人々の生活実態を調査した。その結果、個々人の生活経験に応じて自己/他者認識が大きく異なること、親族を核に据えた、エスニシティの境界を越えた連帯が生じること、逆に、集合的他者カテゴリーの存在を否認することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化した現代世界において、言語や宗教、エスニシティの異なる人々が、隣人として暮らす状況が当たり前になっている。そうした中、人間はいかに連帯するのか、表裏一体の事象として、いかに分断や排斥が起こるのか。共感や同情といった心身の動態に着目しながら考える。研究対象は、中部太平洋の孤島バナバ島から、第二次世界大戦後、フィジーに強制移住させられた人々の子孫である。歴史経験を踏まえて、バナバ人たちがいかに自己/他者の認識を生成するのかを探る。さらに、バナバ人の事例を敷衍して、他者との感情経験の調整を通じた共存のあり方について考察する。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the characteristics of solidarity of Banabans, who forced to migrate from their home island in the central Pacific to Fiji Islands, in the light of empathy, compassion and their historical memory. The research reveals that personal experiences and social circumstances engenders various senses of togetherness, accompanied with flexible self-awareness of Banabans, Fiji born persons, and I-Kiribati. On the contrary, some Banabans, especially in the political and historical discourse, show nationalistic and exclusive attitude against I-Kiribati, disregard of intimate relationships with their relatives and friends.

研究分野：人類学

キーワード：文化人類学 共感 排他性 移民 太平洋島嶼部

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

[人類学における感情]

文化人類学の研究動向を概観すると、人間の理性や言語、自然主義哲学を根底から問い直すとする傾向が見られる。この方向性は、ギリシャ以来の西欧哲学が中心に据えてきた、自然と人間の分離および人間中心主義への批判と軌を一にする。近代合理主義的思考や理性の特権化を回避する人類学的潮流のなかで、理性より下位に置かれてきた身体・感情・感覚が、研究主題としてしばしば採りあげられてきた。

本研究では、こうした動向を念頭に置きながら、強制移住の歴史経験をもつ太平洋島嶼部のバナバ人ディアスポラを対象に据えて、共感 (empathy) や同情 (compassion) という心的事象に着目する。これらの感情が、バナバ人をいかに連帯させるのか、同時に、近接する他者に対する排他性をいかに生成させるのかを追究する。

[共感・同情に関わる着眼点]

共感や同情という心的事象は、神経科学者によるミラーニューロンの発見以降、様々な学術分野で注目を集めてきた。また、共感を含む感情の研究は、人類学と神経科学・心理学を架橋する学術領域である。本研究では、神経人類学 (neuro-anthropology) の潮流を考慮しながら、過度な自然主義批判を留保したうえで、下記の3点に着眼したい。

(1) 共感や同情の原基となる感情や意識下の心的事象に関わる人類学的研究は、自然と文化の二分法を解体し、近代的認識論を組み替える可能性をもつ。

(2) 共感や同情は、人間の社会的行動に強く関与し、コミュニケーションを实践するうえで重要な心的事象である。そして、愛他や慈悲等、人間性を構成する倫理的側面を肯定的に評価する傾向が認められる。それらは、理性的な思考経路や込み入った対話の介在なしに、人々を即時的に結合させる力能をもつ。

(3) 共感や同情は、(2) のように人々を結合させ、内集団の連帯を生み出す。表裏一体の事象として、集団の内閉化は、外集団に属する他者への排他性や暴力を生起させる側面を凝視する必要がある。

[強制移住の歴史経験]

本研究の対象であるバナバ人は、数奇な歴史を辿ってきたオセアニアのディアスポラである。現在、フィジーのランビ(Rabi)島および首都近郊に推定約 4,000 人が居住している。人々の故郷バナバ島 (現キリバス領) では、1900 年に燐鉱石が発見され、すぐに英国領に併合された。1930 年代、英国は、住民の反対を押し切り、土地を強制収用して採掘地の拡大を図った。

太平洋戦争の勃発後、日本軍はバナバ島を占領し、住民は島から強制退去させられた。戦後、英国は燐鉱石採掘を円滑に進めるために、混乱の機に乗じて、故郷帰還を望むバナバ人に虚偽の情報を伝え、約 2,400 キロ離れた英領フィジー諸島のランビ島に移送した。さらに、脱植民地化の潮流のなかで、1970 年に移住先のランビ島を含むフィジーが、1979 年にキリバスが故郷バナバ島を領有して独立し、バナバ人は故郷の島から国境を隔てて分断された。1979 年の燐鉱石採掘終了以降、ランビ島における生活の困窮化が進行するなか、バナバ人は帰郷を果たせないまま今日に至っている。

2. 研究の目的

バナバ人ナショナリストの言明やそれに追従する言説によれば、上述の歴史的背景のもと、バナバ人は、固有のエスニシティをもち、キリバス人との弁別を強調してきた。ただし、そのような論調は、過度に単純化されている可能性があり、人々の日常生活に即した実態を仔細に見る必要がある。そのとき、人びとの微細な感情に目を向けることになる。

本研究の目的は、(1) 共感がいかにバナバ人たちの連帯を生起させるのかを示し、共感の生まれる舞台設定や諸条件を探ること、さらに、(2) 共感が他者に対していかに否定的感情を生むのかを示し、共感の操作により生じる排他性や他者との軋轢の内実を追究することである。そして、(3) 矛盾を孕んだバナバ人の連帯と排他性に着目しながら、共感の有する潜在力について包括的に考察することを目指す。

3. 研究の方法

人類学や隣接分野、さらには神経科学における感情に関する文献研究を行い、議論の枠組みを構築する。その上で、現地調査により一次資料を蓄積し、分析・考察を行う。民族誌資料収集を研究計画の中心に据えて、(1) ランビ島から出てきたバナバ人が居住するフィジーの首都スヴァ、(2) 国境を越えて再移住したキリバスの首都南タラワ、さらに、(3) 広く太平洋島嶼部から移民を受け入れてきたニュージーランドの3地点において、現地調査を行った。

4. 研究成果

[フィジーの首都スヴァ]

スヴァにおける現地調査の中心となる場所は、以下に記したバナバ人の集う拠点である。スヴァは南太平洋随一の都市であり、バナバ人は分散して広域に居住している。したがって、人々が日常的に集う場所を見出したうえで繰り返し訪問し、現地調査を進めた。

(1) ランビ島議会事務所：常勤の秘書官がおり、ランビ島ならびに首都に在住するバナバ人の公的な行事や生活の動向、フィジー政府との関係等について情報収集を行った。また、事務所には、パスポートや奨学金等に関する手続き、証明書の申請等のために、バナバ人が集まってくる。文書資料収集のほか、秘書官や事務所に立ち寄った人びとから聞き取り調査を行った。

(2) メソジスト派ランビ共同教会 (Rabi Community Church)：首都スヴァの中心部に近い通称ケテマネ (Ketetemane) とよばれるメソジスト教会には、バナバ人の牧師夫妻や親族が居住している。日曜日の午前と午後に行われるキリバス語の礼拝、それぞれの礼拝後に集会所で行われる共食には、スヴァ在住のバナバ人信徒が数多く集まる。

ランビ島の牧師や教会委員 (komete) が会合出席のため、ケテマネの集会所に寄宿することもある。また、バナバ人男性が教会建物の修理や拡張工事を行ったり、教会関連行事のために女性が手芸や調理等の作業を行うこともある。こうした人びとから聞き取り調査を行った。

(3) 在フィジーキリバス高等弁務官事務所：バナバ人のなかには、フィジーからキリバスへの国籍変更を行う者がいる。高等教育の機会を望む者は、キリバス国籍取得により、キリバス政府を窓口とした海外からの奨学金を得ることが容易になる。また、キリバス人の親から土地相続を受けて、キリバスへ再移住することもある。高等弁務官事務所において、キリバスに渡航するバナバ人の動向について詳細な情報を得た。

(4) カヴァ・バー：ランビ島議会の経営する嗜好性飲料カヴァの店舗がある。主に、バナバ人男性が娯楽のために訪れる。カヴァを飲みながら歌を歌ったり、ゲームをしたり、雑談を楽しむ場所である。カヴァを飲みながら、ランビ島議会のゴシップを含めた多様な情報収集を行った。

(5) キリバス系住民集住地区：スヴァ近郊には、ヴェイサリ (Veisari)、ナシヌ (Nasinu) 等、19世紀末から20世紀初頭にプランテーション労働者としてフィジーにきた、オールドカマー・キリバス人の子孫が居住する地区 (フリーホルド地またはリース地) が複数ある。こうした地区には、数世帯単位でキリバス系住民が居を構え、バナバ人女性がしばしば婚入している。キリバス人居住地区は、ランビ島やキリバスからスヴァに来た親族が滞在する、都市の拠点である。バナバ人とキリバス人は、日常的に分け隔てなく生活している実態を把握した。

[キリバスの首都南タラワ]

南タラワ (Tarawa Teinainano) には、第二次大戦前後に住み始めたバナバ人のほか、土地相続を受けたり、就学・就業の機会を得るべく、1990年代から2000年代になって、新たにフィジーから再移住したバナバ人がいる。以下の点について情報を収集した。

(1) 再移住者の生活実態：フィジーのランビ島で生まれ、青年期や壮年期にキリバスに移住してきたバナバ人の生活実態を把握した。フィジーとは異なる環境下で生活するなかで、バナバ人としての自己認識は大きく変化し、自己をキリバス人と自認する男性がいた。一方、自らをフィジー出身者という枠組みで捉え、キリバスにおいて疎外感を表出する女性もいた。

(2) 饗宴における交流：タラワでは、教会行事や人生儀礼等の機会に、饗宴が頻繁に開催されている。バナバ人は、キリバス人とともに一般的な饗宴を開催したり参加していた。一方、バナバ人の「ランビ島上陸記念 (12月15日)」の饗宴を開いて祝賀しているという情報を得た。

(3) 歴史記憶に関する聞き取り：バナバ人の系譜を引きながらも、キリバス人を自認するバナバ系の人物が南タラワに居住している。逆に、バナバ人の妻としてランビ島での生活経験をもつ女性は、バナバ人の歴史経験について同情的に語っていた。

[ニュージーランド]

ニュージーランドの南オークランドに在住するバナバ人・キリバス人夫婦世帯に住み込んで実地調査を行った。妻はフィジーのランビ島で生まれ育ち、十歳代後半に両親の住むキリバスの首都タラワに移住し、就学・就職した経験をもつ。そして、キリバス人男性と結婚した後、オークランドに再移住してきた。ニュージーランドでは、キリバス系移民が年々増加しているといわれるが、国内で未だ目立った存在ではない。

日常的には孤立した生活を営むなか、キリバス系の人々は、非熟練労働に従事して生活を維持しながら、SNSを活用して連絡を取り合っていた。人生儀礼、キリスト教会活動、週末のカヴァ飲み (男性)、子育てサークル (女性) に参加して、キリバス系住民間の紐帯を築いていた。さらにSNSにより、国境を超えて、キリバスやフィジーに住む親族との間で写真や文字情報を交換・共有していた。

ランビ島出身女性は、ほかにもフィジーからオークランドにきたインド系住民に対して、共感や郷愁を示し、親しみをもって接していた。このように、バナバ人・キリバス人の親族を核として、キリバス語話者の移民、さらにはフィジーからの移民といった属性を使い分け、共感を伴う相互関係を築きながら、新たな移住地において社会生活を営んでいることが確認できた。

本研究では、強制移住の歴史経験をもつバナバ人を対象とし、共感や同情といった心的事象に着目した。これらの感情がバナバ人ディアスポラをいかに連帯させるのか、同時に、近接する他者に対して排他性がいかに生成されるのか追究した。感情に関わる人類学の文献研究に加えて、故郷バナバ島からフィジーのランビ島を経て、首都スヴァおよびキリバス、さらにニュージーランドに再移住した人々の生活実態を調査した。

その結果、個々人の生活経験に応じて自己/他者認識は大きく変化し、自己の親族を核に据えたエスニシティの境界を越えた連帯や、ランビ島の記憶に基づく他者とのナショナルな次元の共感が生じていた。一方、フィジーに住むバナバ人の集会において、キリバス人という抽象的な集合的他者の存在を、否定的に評する言説が流布していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 風間計博 | 4. 巻 43 |
| 2. 論文標題 フィジー都市部に居住するバナバ人のエスニシティと自己認識の複相性 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告 | 6. 最初と最後の頁 729 777 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 風間計博 | 4. 巻 81 |
| 2. 論文標題 序 現代世界における人類学的共生の探究 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 文化人類学 | 6. 最初と最後の頁 450-465 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 風間計博 |
| 2. 発表標題 オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的 研究 |
| 3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 風間計博 |
| 2. 発表標題 バナバ人の歴史歌劇とナショナリズム 「史実性」をめぐる一考察 |
| 3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 風間計博 |
| 2. 発表標題 パナバ人の歴史歌劇にみる「共感」の力 |
| 3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「応援の人類学 政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|------------------------|
| 1. 著者名 風間計博（編） | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 307pp.+vii |
| 3. 書名 交錯と共生の人類学—オセアニアにおけるマイノリティと主流社会 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|